

生命の階段を降りながら

こうち
河内愛子

1 十月の旅

二〇〇五年六月、思いたってわたしは近畿日本ツーリストに「ポルトガル・スペイン十日の旅」を申しこんだ。次女は自分で見つけ手続きしたセビーリアの街、語学学校と住居に、二年前、一人の見送りの断り、さっさと発って行った。とはいえ、住みつけば胸に描いた場所とは大分ちがいで、望む仕事も日本と同じ、なかなか見つからない。みやげ物屋の売り子をして細々暮らす娘に会って、励ましたかったのだ。

「あっちこち、いろんな所に連れてってあげたいけど、時間がないの。ツアーで来てくれれば、あたしも三日くらい休みをもらってツアーに入って歩くのがいいんじゃないかな」と、娘は言った。旅行会社も娘の三日分の費用をもらえば、問題ないと言ってくれた。かくて二十四時間以上飛び続けて飛行機は、オレンジ・紫・ピンクのまじる美しい夕焼けの燃えたつ空の下を、リスボンの大地

にすべりこんだ。

ジャカラランダの紫の花がどこの並木にも満開だった。バスはさっさとメインストリートの大きなホテルにわたし達を運んできた。ロビーの一面にツアー全員が集まり、添乗員の小山さんがそれぞれにルームキーを渡し、明日の予定の説明を始めた時、回転ドアから娘がとびこんで駆け寄ってきた。早く着いたのでリスボン市街を歩き回っていたそうだ。翌日の自由行動で、娘とわたしはバスでまっすぐロカ岬に行った。ポルトガルではスペイン語があっさり通じる。EUのおかげで国境もないと同じ。わたしは若い時からロカ岬にあこがれていた。大昔、ヨーロッパの人は、この岬が世界の果てと信じて目路めじはるかに拡がる大西洋も水平線で滝になり、海底に流れ落ちると信じていた。そこに何がいるかはわからない。今日は大西洋の海原に船影はなく、灯台のまわりも人は見えないう。空はみごとに青かった。夜はポルトガル料理のレストランでワインとおいしいタラ料理を味わいながら、黒ずくめの男性グループのファドを聴いた。次の日は大急ぎで天正少年使節が女王に謁見したという宮殿の中を回ると、バスは国境を越え、オリーブ畑のあいだを一路アンダルシア地方に入って行った。娘とわたしは休みなしのおしゃべりで観光はだいたい上の空、セビーリアのきんきらの大聖堂もろくろく見なかった。ランチをしながら皆さんにいろいろなことを聞かれ笑い、娘はそこでツアーを外れた。部屋に行く暇などありようはなく、娘は涙目になっていたが、いろんなご馳走を食べさせてやれて、わたしは嬉しかった。

この時からわたしはツアーの完全な一員になった。添乗員の小山さんはたぶん三十を過ぎた、はきはき明るい女性。旅行仲間は定年を過ぎたらしい夫婦四組、障害のある娘さんを連れた三人家族、勤めの休みをとってきたという旅行好き話好きの男性二人。残りの高齢者はわたしを入れてあと男性二人、計十六人だった。その夜の食事も踊りも超豪華なフラメンコパーティーでわかったことだが、家族連れは家族とばかり話をし、食事も一緒、自然とわたし達三人は食事は同じテーブルに座ることになった。偶然にもわたし達は三人とも七十五歳だった。珍しくもないことだが、男二人は口数が少ない。いきおいおしゃべり役はわたしである。さっさと二人のことを聞き出した。

北沢さんは中肉中背、ふっくらした顔でいつもここにこしている。横須賀市で一人暮らし。雪印乳業に勤めていた。奥さんをなくしていた。相田さんは薬剤師で病院勤めだった。世田谷のマンションにやはり一人暮らし。奥さんはなくなつた。二人とも海外旅行には二十回以上行つてゐるらしい。きつとお金があるんだ。ただ不思議なのは、二人ともポルトガルにもスペインにも大して関心はなかつた。これまで行つたことがないから来てみたということらしい。ツアー参加者の半分もそのようだ。わたしは山形市に長女と住んでいて、四年前に夫をなくした。スペインもポルトガルもずっと行つてみたい国だったりするから、かけ持ちで娘に会いにきました、と自己紹介した。そこいらまで二人の男性は共通しているみたいだったが、実はちつとも似ていなかった。北沢さんは人好きのする親切な人だが、すらりと長身、一見ダンディな相田さんは笑顔がなく誰とも話さず、移動の場所に着くが早いか、カメラをかついで消えてしまう。食事でもいつも一緒だから悪い人でないのは十分わかるが、あとはわからない人であつた。

セビーリアの翌日は、アンダルシアの世界的観光地グラナダのイスラム国王が建てたアルハンブラ宮殿を半日かけて回り、コルドバの二千年前ローマ時代に造られた美しいローマ橋を見た。川の背景にも中洲にも緑の樹々が茂つていた。遠くに霞む家々の白壁、その間にイスラム寺院を改装した大聖堂がすつくと見える。うっとりして眺めてはつと見廻すと橋の上には誰もいなかった。置いて行かれた。出発しまゝすと小山さんが呼んでいるのも気づかなかつたわけである。ここが何という場所や行く先の街とホテルの名もわたしは聞いていなかった。他の人達のようにメモもしなかつた。昔からそうなのだ。皆さんのあとについて歩けば大丈夫とばかり思つていた。面倒はきらいなのに誰もいなくなつてしまった。どうしよう。昨日別れる時の娘が不安そうにしていた顔思い出した。村の人が通つたつて、一言も話せない。十分とたつてはいなかつたと思う。蒼ざめた小山さんを先頭に、皆さんがどやどや現れた。五分ぐらい歩いた所で、誰かがわたしのいないことに気づいて、騒ぎになったのだらう。ドジはしょっちゅうだが、困るのはたいいてい自分だった。小山さんは、わたしが迷子になったり川に落ちたりしたらと考へて死にそうだったと思う。あやまり続けていた。わたしも、ただただ恥ずかしくて頭を下げ、下を向いていた。

それ以来、北沢さんはわたしのそばを離れなくなった。危なっかしい人間であることがわかったからである。荷物は持ってくれる、探し物をしていても、すぐ見つけてくれる。ルームキーがうまく使えないでいると、すぐ来て開けてくれる。ありがたいこと、この上ない。

ローマ橋失敗の夕方、着いたのは、地中海沿いの有名な避暑地トレモリノスだった。夕食後、北沢さんが散歩に誘ってくれた。明日の朝も早いから、この街を歩くのは今しかない。十時を過ぎていたが出てみることにした。街の両側の店やアーケードの天井、どこもさまざまな色の灯りが輝き、人がぞろぞろ歩いていた。坂になっている通りを降りて行くと暗い海岸に出た。地中海だ。街灯が一つだけぼんやり点いている。ベンチがあったのでわたし達は寄せては返す波の音をしばらく聞いていた。

「異国の夜、地中海の浜辺で、知らない男性と波の音を聞いているなんて素敵」

わたしは少し笑って言った。彼は黙っていた。

夫ならこういう時、必ず気の利いた言葉を返すのに。わたしは心の中で、夫の言葉の幾つかを懐かしく恋しく思っていた。

数日一緒に歩いているおかげで、北沢さんのことは大分わかった。満州の大連からの引き揚げ者であること、同時代を生きてきたから、大連が地図のどのあたりか、すぐわかる。

「アカシアの街ね」

「うん、清岡卓行だ」

「読みましたか」

「いや、名前知ってるだけ」

奥さんを癌でなくした。子供はいない。一人住まいだが、隣に妹の家族がいる。二年前、エジプトに姪っ子連れて行った。一人ぼっちでないんだ。嬉しい、ほっとする話だった。

旅も終わりに近かった。あれはトレドでの自由時間だったろうか。みんな出払っていた。添乗員の小山さんが笑いながら言った。

「河内さんと北沢さんはご夫婦と、たいていの人が思ってますよ」

「わあっ、面白いーっ」

わたしは声をあげ、北沢さんは相変わらず黙っている。

「あたしまだ三十三なんですよ。なのにまだいい人に会えない。いったいどうなってるんですかっ」
たしかにツアーでは初日か二日目ぐらいで仲良くなっていつも一緒にいるカップルを、彼女は何十組も見えてきたことだろう。ただし二十代から五十代までぐらいの人達か。七十五歳同士なんて見たことないだろう。

「そのお年で、どうしてそんなにもてるんですかっ」

トーンが少し高くなってきた。

「大丈夫。あなたなら、ちゃんと良い人に逢えるわよ」

わたしも少し哀しくなった。無責任な励ました。

「そう、そう、頑張ったらいい」

北沢さんも優しく彼女の肩をたたいた。

帰りはバルセローナー成田間の直行便だった。これまでのツアーの記憶では、旅行中かなり親しくなったつもりでも、成田でさよならしたとたん、道で会っても誰だったか思い出せない、というの、ツアーのならいだ。わたしはそんなのは嫌いだから、手帳に小山、北沢、相田、三人のアドレスを書いてもらった。小山さんは別として二人とも、わたしがアドレスを聞くななんて思いも寄らないようだった。礼状出したって、返事はこないに決まっている。

2 予想外のことがやってくる時もある

長女と二人の日常がまた戻ってきた。次女のバイトは、お茶屋に変わった。自分の仕事もある。それでもわたしは三人にハガキで礼状を書いた。楽しかった旅のお礼だ。相田さんはピンとこない

だろうが。夏が終わり秋も過ぎようとしていた頃、いつも気むずかしい表情で話らしい話もせずにと終わった、相田さんから突然ハガキが舞い込んだ。ピントの外れた文面だ。定規を使って一字ずつ書いたみみたいな面白くない文字と文面だ。メール文字とも違う。

清涼の候になりました。小生鬱が長引き御返事がおくれましたこと、御詫び申し上げます。少しは効果あるかと、夏はスペインに参りましたが、役にたちませんでした。あの地は小生には合わないようです。中国はいかがでしたか。御健勝を祈り上げます。 敬具

何でだか一拍ずれている。ほうっておくことにした。年が明け、北沢氏から年賀状が来た。今年にはニュージールランドに行くとのこと。彼は元気で何よりだ。相田氏の鬱が気になっている。遅ればせ、年賀状の余白に一筆書いた。〃カンチガイしておいでなのですが、私はスペインの旅で御一緒した者です。御健康を祈ります。〃。今回の返事は早かった。大げさだがまともな文面。〃。去年の中国旅行の折、上海のとある食事の時、中国で働いている夫に会いに来た女性と少し話をした。その人のハガキとカンチガイした。土下座してお詫びしたい。〃と。若くて綺麗な女性だったのね。わたしは思わず笑い、彼が妙な人物でないことにほっとした。彼は今度の上京の折は是非お会いしてお話したいから連絡して下さいとも書いていた。あの一週間のあいだに、わたし達は一度も直接話

したことがない。思えば遠い人である。

さらに一年が過ぎた。わたしは女学校の関東支部同窓会に出席し、その夜は昔のクラスメート七人と日赤の宿舎に泊まって大騒ぎし、翌晩は江東区の息子達のアパートに行った。窓から手を伸ばすと隣家の窓に届くほど家がたて込んでいた。当日現れなかった人に電話するつもりで手帳を開くと、相田さんの番号が目に入った。考えもなくダイヤルした。彼が出るまでしばらくかかった。耳が遠くなっているようだ。

彼は懐かしそうに、明日お昼をご一緒しましょう。何なら息子さん達も一緒にと言う。ちがう人にかけてるみたい。多重人格？ まさか。スペインで知り合った人と言うと息子は少し釈然とした顔をしたが、明日は土曜日だから妻と二人で深沢のマンションまで、車で送ってくれると言った。ドジばかりするが、どこに行っても誰かと仲良くなるたちの母親を、子供等はよく知っている。

相田さんはマンション玄関の前に立って待っていた。息子のつれあいは後ろのわたしの傍に移り、助手席に相田さんが座って二子玉川駅前の和食堂に三人を案内した。相田氏と息子は大人の男の世間話をし、天ぶら定食をご馳走になり、彼らはさっさと帰って行った。そしてわたしは相田氏の住む六階までエレベーターで行く。4LDKというのかしらん。築三年、冷暖房完備という住居はピカピカだった。こういうところに住んでいる友人・知人はわたしにはいない。二十畳ぐらいの居間兼客間でわたしは感心して足が沈むほど厚いじゅうたんや恐らくチェコ製の美しいガラスの花瓶を眺めた。もったいぶった様子はまるでなく、お茶を一杯出すと、彼は飾り気無く淡々と自分の人生を語りはじめた。

「僕は名古屋生まれです。親父は材木屋でした」

「わたしの記憶にある昭和初年の材木屋さんは大きかったとは思えないけど、お金持ちのようでしたね。一帯の数軒の借家の持主だったし」

「親父は大きい材木屋でした。戦前ですから貴族院議員とか大地主が家を建てる時、和歌山の一番上等の材木を仕入れる力があるのが一番の材木屋。僕は今でも柱の木や長押ながしの木組み、欄間らんまの彫り物とか古い屋敷を見るのが好きです。環境でしょうね」

知らない世界や人への好奇心が湧いた。

「兄弟は兄と僕の二人。兄は二つちがい。母は僕が生まれて間もなく死んだと聞かされてきました。死んだのは本当です。うちの墓に名前、生年月日、命日、戒名、みな彫つてある。しかし写真一枚残つてない。父親、雇い人、親戚、一人として生母について僕と兄に語ってくれた人がいない。おかしくないですか」

「おかしいです。どんな訳があつたんでしょう」

「僕のところは面食いの家系でしてね。物心ついた時は、美人の元芸者が美少女の連れ子を伴い後妻になっていました」

話としては面白い。しかし美人だが意地の悪い継母に父の見えないところで息子達がいじめられて育ったのが現実だったとすれば、許し難いことだ。ただなんで彼は初対面同様で、何も知らない自分を相手にこういう身の上話を始めたのか。

「僕の一番古い記憶ですけどね、家族が食卓を囲んでるんです。やっと歩けるぐらいの僕が外側に立って見てる、こつちにおいでと誰かが呼んでくれるのを待ってる。でも呼んでくれない。これ夢なんでしょうか、いや違う。リアルな思い出だ」

「切ない哀しい思い出ですね」

「でもやんちゃな男の子の兄はもつとひどかった。僕はおとなしくて、そんなに悪さはできない。兄が怒られ折檻せうかんされるのをいつも心を痛めて見てましたね」

昔はほとんどの家が子だくさんだった。わたしの遊び友達の中にも子だくさんの上に貧しい家族はいて、親はよく子供を怒鳴ったり殴ったりしていた。しかし陰湿な継子ままこいじめは芝居か昔話の中にしかなかったように思う。十歳前でも相田次郎さんの方がはるかに深く醜い人の世を知っていたらしい。金持ちの坊ちゃんだったおかげで。可哀想に。

長ずるに及んで兄は不良少年、そしてやくざの仲間になった。「親父に金があるから、気の弱いところに目をつけて利用されてただけなんです」と次郎さんは言う。一方、次郎さんは私立の進

学校に行き、学徒勤労働員や名古屋大空襲を生きのび、京都大学法学部受験はうまくいかなかったが、岐阜薬科大学に進み家を出た。ぶじに薬剤師になり、就職。自立し、やがて東京に移りいろいろ好きなことに手を出したような口ぶりだった。日本映画の全盛期でもあった。だからシナリオ学校にも通った。登山、剣道、職場の病院では民社系労働組合の委員長になった。一番輝いていた時代だったかも。そして恋愛。あー。父の息子だからやはり相手の方は美人だったんですね、と聞くとうなずく。

「ただ彼女は僕の友人の妻でした」

漱石の『それから』みたい。そこだけは。

「相田さんが奪ったのね」

「というより、わがままで浪費もひどくて、僕は友人が彼女と別れるための相談相手でした」

「その女性のひどいところは洗いざらい知ってた。世の常の恋愛とちがいますね」

「そのはずなのに、そうならなかった。そういうもんでしょ。ある晩、勤めから帰ってくると、何か抱えて彼女がしょんぼり立ってた。二時間ぐらい待ってたらしい。抱えてたピンクの兎の縫いぐるみを出して、これを担保に千円貸してくださいませんかって涙を浮かべてる。哀れでした。借りられるところから借金しまくって、どこからも相手にされなくなってたんです。その瞬間、閃ひらめいた。この女を助けられるのは、俺だけだ」って」

「そういう瞬間、人生にはありますよね。わたしも身に覚えがある」
そのあとは聞かなくともわかる。

二人は結婚し、堅物の夫と、何でも欲しくなる妻は、喧嘩の絶えない夫婦になった。
「かたぎの方だったんでしょ」

「銀座の松屋デパートの職員食堂の栄養士でした。ただ悪いことに、松屋は流行最先端の品をいつもそろえて並べてた。猫に鯉節。金の使い方で喧嘩になると、彼女はそばにあるものを手当たり次第ぶつけてくる。僕は一つずつ拾って並べるんです。（ほんとかしら。信じられない）ママをいじめめるな」って息子はいつも泣きました。

「あなたがDVの夫だったとわたしは思わない。でも全く無抵抗の父親に、六年生の息子がいじめらるなって言うかしら」

「あの夜も組合の仕事で、帰ってきたのは、夜中でした。元華族が使用人一家を住まわせていた門の傍の小さい家を僕は借りてました。遅い時間なのに家じゅう電灯つけっぱなし、玄関も裏の戸も開いてる。箸一膳、タオル一枚残ってなかった」

「手伝った愛人がいたんですね」

「それはいいです」

断固としていた。親子二人だけで、そんな出て行き方できるものか。でも黙って聞いていた。

電話が鳴った。わたしの息子が迎えにくるのだ。

「いろいろお話できて、とても楽しかった。三日間だれとも話さないことが多いんです。またどうぞいらしてください。お隣にどんな人が住んでるかも僕は知りません」

「そんな暮らしを続けていかれたら、どうなりますか。お友達はいないんですか」

「いますよ。ただみんな遠い。会うのは年一度の同窓会だけ、それもぼつりぼつり減っている、八十歳ですからね」

哀しそうだった。わたしの同窓の男子だって同じようなものだ。

暗くなるまで、これまで会ったこともない相手に、彼が話をやめなかった理由がすとのみ込めた。長いあいだ、相田さんは話す家族も友達もいかなかったのだ。この人はぜんぜん人間嫌いではない。継母、兄、元妻を語るのに怒りや恨み、憎しみの言葉は一言も言わなかった。にもかかわらず……孤独なのだ。

「これから、時々お電話しますね。お話聞かせてください」
話しているうちにブザーが鳴った。

約六年間、わたし達は一ヵ月か二ヵ月に一回ぐらい電話で二十分前後、話をするようになった。八十代の人間、それも相手をろくに知らない同士はこれが精いっぱい、それでも老化は進む。わたしはやつと三回、彼を訪ねた。初めのころ知りたかったのは失踪した妻と息子さんと、いわば見捨てられた相田氏のその後だった。職場がはつきりしているから行方不明になったわけではない。母親が親権者で父親が養育費を送る、一日も遅らしたことはない。

「本人がその気なら大学に行かせたかたんですが、その気はありませんでしたね。ただ彼の誕生日には、毎年銀座で三人で食事することになってました。元・妻は名の通ったホテルのレストランの食事を楽しみにしてました。でも息子はね、『ライスカレーでいいよ、町の食堂で』といつも言いました。」

「良い子ね」

わたしは感心した。

高校を出ると、彼はイトーヨーカドーに勤めた。親子は武蔵小金井に小さいマンションを買って暮らしていたが、ある日留守番をしていた元・妻は、急性心筋梗塞で急死した。かたちは息子が喪主だが、実質、葬儀を出したのは相田氏である。この二人どうなってるんだ、と思いつながら、わた

しは綺麗に貼られた葬送の写真、おまけに、はるか前の二人のハネムーンで伊勢神宮で撮った写真まで見せられた。彼女は日本風の美人のようで、二人とも嬉しそうだった。とにかく、息子と二人で生きてきたその人の面影からわがままで金遣いの荒い人という印象は伝わってこない。なぜ相田氏も元・妻も再婚あるいは復縁しなかったのだろう。わたしには謎であった。男と女のつながりは他人にはわからない。

東日本大震災の前の年だったか、二度目に訪ねた時、彼はかなり足を引きずっていた。上等のお寿司をご馳走してくれたあと、彼は遠慮がちに言った。

「お近づきになってたくさんお話してきたこと、こんな楽しい老後が僕にやってきたことに驚いています。何かプレゼント差し上げたいんですが、何がいいですか。何がいいかは僕はさっぱりわからないのですが」

おやおや、どうせ彼は駅前に並ぶデパートで、アクセサリーの何かを、と考えているのだろう。でもわたしは生前、夫が買ってくれた並の値段のアクセサリーで十分なのだ。おまけに带状疱疹のあと神経痛に五年以上悩まされて、衿のあるブラウスやセーター、ましてネックレスやペンダントは、痛くて身につけられない。

「嬉しい、びっくり。ただずうずうしく言わせていただければね、前から好きだったんです、そ

このアンティークドール。いま頂かなくていいのよ、相田さんがなくなられたあと、形見に頂けるよう一筆書いてくださればいい」

誰が知り合って数年の相手にそんなこと言うか。どっちが先に死ぬかだってわからないのに。それは高さ三十センチの目もとの涼しい少女がヴァイオリンを持ち、弓を構えて立っている西洋人形だった。こげ茶色のビロードのドレスの上にオレンジ色、裾をレースでふちどった短い上着を羽織っている。ウエーブしたこげ茶の髪に白っぽい帽子。相田氏は案の定げんな顔をした。が、すぐ「わかりました。今日お持ちになればいい」と、棚のガラス戸を開けた。

「いますぐなんてそんなー。とても高いものじゃないかな。二十万ぐらい？」

「まさかね、そんな高いもの、僕は買いませんよ」

「じゃあ、十万円？」

「忘れたけど、そんなとこだったかな」

それにしたって、あっさりもらえる金額ではない。彼はさっさと薄くやわらかい白い包み紙と伊勢丹の包装紙を出してきた。

一九四〇年、若い時、わたしの父親を熱く慕っていた田村さんという男性が青森から父を訪ねてきて、その帰り、わたしを仙台の三越に連れて行った。あらゆるぜいたく品が姿を消していた時代だが、おもちゃ売り場と隣の人形売り場に、恐らく戦前に仕入れ、高過ぎで売れ残っていたらしい

五十センチもある西洋人形を、小父さんはわたしに聞きもせずさっさと包ませた。見たことのない美しいドレスでブロンドの巻き毛、青い眼の人形だった。おぼえているのは、「どうしよう、どうしよう、こんな高いものを小父さんに買わせて（たのんだおぼえはない）叱られる、叱られる」と思っていたこと。何年もたたず人形は灰になった。わたしのぜいたくな西洋人形好きは、そこから来ている。知っていれば有名作家手作りの人形展や、もちろんアンティークの西洋人形展を見に行く。もちろん買ったことはない。娘たちも母親の人形好きを知らない。

厳重に包んで持たせてくれた人形を見送る時、相田氏は「娘をお嫁つふやにやる気分かな」と呟つぶやいた。わたしはいまだに、相田氏がこの高価な骨董人形を欲しくて買った理由を知らない。

4 相田氏の涙

幾つになっても相田氏にとりついて離れない悩みは「兄」であった。話のたびにその悩みが出てくる。大昔から悩み苦しみは人間につきものだが、そこを突き抜ける老人もたまにはいる。彼はできなかつた。

相田氏は言った。若い時、自分は何十回も東京と名古屋を往復し、父の実印を盗み出した兄の尻ぬぐいに、指のない恐ろしい連中に父から預かった万札の束をたたきつけた。だが父は兄を勘当し

なかったし、自分も兄弟の縁を切らなかつた。このマンションも、兄と暮らすつもりで買ったのだ。二人が死んだあとは、息子が住めばいい。だが名古屋の裏街で生きている兄は、いくらすすめても来ない。女でもいるのか、それもわからない。時々、金を無心する、やたらにいていねいな手紙がくる。家賃を三カ月滞納して立ち退き令状がきた、よろしくお願い申しあげます、みたいな。こつちも余裕はない、これが最後と思ってくれ、あとは何を頼んできても断る、と書きながら送金してしまふ。アカの他人は呆れているばかり。同じことのくり返した。わたしが何か言えるとも思えない。知り合つて五年もたつていないし、良い知恵のあろうはずがない。彼等の父は長命で八年だか前に九十五歳でなくなつた。親孝行の相田次郎氏は、父をよく温泉に連れて行つた。遺産相続の話し合いで父の正妻の継母は、あれほど父を苦しめた兄はビタ一文もらう権利はない、と強硬に主張した。父と養子縁組をしていた連れ子の二人が遺産の半分以上をとつた。次郎氏も二人に反対することはできなかつた。その時、兄の老後は自分が引き受けようと覚悟した話はウソではあるまい。問題は兄がここまで長生きするとは思わなかつたことと、弟と住む気のないことだ。

当時、退職した次郎氏は海外旅行の魅力にとりつかれていた。ある日「イスラエル一周 幕屋主催」のポスターが電柱に貼つてあるのを見た。旅行会社の「イスラエルツアー」は聞いたことがない。面白そう。大井町駅前の幕屋主催とあるので行つてみた。事務所員の応対に胡散臭さはなく、それ

に安い。

「幕屋^{まく}つて知ってますか」とついでに聞かれた。

「ちょっとだけね。エホバの証人やモルモン教みたいな知名度はないけど、キリスト教系の新興宗教じゃないですか」

彼はさつそく申し込んで出かけた。中東情勢がたまたま平和な時だった。キリスト教の関係者が多く、和やかな気持ちいいツアーだった。帰国後しばらくした頃、幕屋集会の案内がきた。旅のお礼に一回おつきあいのつもりで、出かけた。講演（説教）は放蕩（道楽）息子の話についてだった。次のような話だった。

二人の兄弟がいた。ある日、父のところに弟がやってきて頼んだ。「お父さん、財産のうち僕の頂く分を、いま分けてください」。父は財産を二人に分けてやった。すぐあと弟は自分の全財産をまとめ、遠い国に旅立つた。彼はそこで遊女たちと一緒にになり、友達と遊び暮らし、全財産を使い尽くしてしまつた。その頃その地方を大飢饉^{きん}が襲つた。一文無しになつた弟がようやくありついた豚飼いの仕事で、彼は豚の餌のいなご豆を食べて飢えをしのいだ。ようやく我に返つた息子は、帰つて父に言おうと思う。「お父さん、僕は天に対しあなたに対し罪深い息子でした。どうか僕を雇い人として扱ってください」と。そして父のもとに急いだ。まだ遠くにいた彼を父

は見つけ、哀れに思い駆け寄って、彼を抱きしめた。使用人に一番良い服を持ってこさせ、足に靴をはかせた。一番上等の仔牛を殺し宴会の準備をした。「我が子が生きて帰ってきたことを」祝うために。畑から帰ってきた長男が家に近づくと音楽がきこえた。父の大喜びを聞いた長男は怒って家に入らなかつた。彼をなだめようと出て来た父に、兄は言った。「自分は長いあいだあなたに仕え、一度も背いたことはありません。なのにあなたは、わたしが友達と楽しむために仔山羊一匹くれたことはない。一方、好き勝手に生きてあなたの資産を食いつぶした弟が帰ると、あなたは肥った牛を殺したんですね」。その時、父は長男に言った。「息子よ、おまえはいつもわたしと一緒にだ。わたしの物は皆おまえの物だ。だがこの弟は、死んだのが生き返ってきた。失われたものが見つかったのだ」と。

どのあたりで涙が流れ出したのか、相田氏はわからないと言う。わたしにわかるはずがない。涙は止まらず嗚咽おえうになった。信者の男性が傍にきて、静かに背中を撫でてくれた。幕屋との縁はその日で切れた。ただ何年もして、その日のことを詳しく話してくれたのだから、忘れていなかったのである。ただし説明らしい説明はなかつた。だからわたしも聞いたことだけを、時々思い出す。

5 えびろーく

東日本大震災がきた。わたしと知り合つて山形が近い県になった。おいしい食べ物と自然の美しい山形に行つて温泉に入りたいと何度も言つていた相田氏も八十歳を過ぎ、訪ねてくる元氣はなさそうだった上に津波が来た。わたしと同じぐらいで相田氏が少しだけ知り合いだった、佐渡出身で息子といわきに住んでいた女性が被災して訪ねてきた。一ヵ月以上とは思わず、部屋があるから泊まつてくださいと相田氏は言つたはず。食事は別にしたが、バス・トイレ・キッチンは一つだ。さすがに疲れたと言つていて、氣の毒だった。

相田氏へのわたしの見方も少しずつ変わつてきた。彼女の人生を引き受けようと決心した夜、元・妻が抱えてきた兎の縫いぐるみをお見せしましょうかと聞かれた時、わたしは「はい」とは言つたが内心うんざりしていた。

さんざん苦汁をのまされた女の過去の遺物を手放しめせず大切にしているなんて、どうかしている。色褪いふあせて灰色がかった兎の耳はだらんと垂れていた。恋の形見というみたいにな。

ただ見方を変えれば、ひよつとして彼は今もわがままだった元・妻を愛し続けているのかもしれない。死んだあとさえ、愛を手放さないためには、その弱点、利己主義のすべてを許し受け容れるしかない。言葉の表現はないが、相田氏とは、それができる男性だったのかも。それを自分のロマンティズムとわたしは思いたくなくかつた。辛つらく孤独な人の表情を彼は一人の時ときはしているのだ。

「この頃、隣の六畳に兄の足音がするんです。そんなはずない、錯覚にきまっていると思って襖すまをあけるともちろんいない。ほっとします。でも次の日もきこえる。いないことを確かめる、くり返します。これ認知症の始まりですかね。診てもらった方がいいですかね」

不安そうだった。助けを呼び相談すべき相手は一人息子の相続人であろうに。

「そうですね」

考え考えわたしは言った。孤独な老人の不安がこたえた。

継母と、血のつながらない姉が、父の遺産の兄のとり分を横取りするのをやめさせようと、彼は戦わなかった。もの心ついてから、彼女達に逆らわずにきた習慣が七十歳を越しても、沁みついてきた。十万でも二十万でも渡すべきだとさえ言えずにきてしまった。相続でもらうはずの金額以上を兄は使ってしまった、というのが彼女達の言い分だった。生みの母なら、そんなことは言わない、母が恋しい、母に会いたい。名古屋大空襲が、戦争が市民のとり返すすべない存在証明を焼き尽くした。

父の死後数年して、相田氏の継母はなくなった。義理の姉はますます金持ちになり、その資産を狙う悪者や泥棒がますます恐くなった。家の回りに高い塀をめぐらし、人を中に入れず暮らしているといつか聞いて呆れて笑った。

「相田家の跡継ぎは全員ひとりぼっちなのね。お金は本当に魔物なんだ。お話を聞いていると、お金はそれだけでは人を幸せにしないんですね」。持たない者の感想だった。彼の思いが少しずつ伝わってくる。兄をどこまでもかばわなかったこと、組合活動と趣味にかまけて、本気で妻のことを考えてやらなかったこと、それらの痛みが幻覚、幻聴になっているのかも。

優しい人なんだ。いつか窓から見える緑の森を指さして言っていた。

「園芸高校の森なんです。都心にあんな広い森はめつたにない。息子に自然を残してやりたくて、ここを選んだんですが、わかってないようです」

数日後に電話したが、留守電、二度目、三度目も同じ。入院か、施設に入ったか、いずれにせよ彼は一人で何から何まで決めて動いたに決まっている。どこであつても息子さんがたびたび行ってくれてるといい。半年後、電話は「使われておりません」になった。

多分どこかで、彼の人生は終わったのだ。

居場所も尋ねる人もわからないわたしは、見舞うことも、便りを出すこともできなかった。ただ時々、本当に許して愛することを知っていた相田次郎氏のことを考える。わかってもらえず、ほとんど独りぼっちだった彼のことを。それでも優しさを手放さなかった人のことを。当人は気づかなかったかもしれないが、それはたしかな幸せだった。

短い時間でしたが、いろいろありがとうございました。どうしていらつしやいますか。平安を祈っています。さようなら。